

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

国立市中 1-15-1

TEL.042-572-5141

FAX.042-573-0480

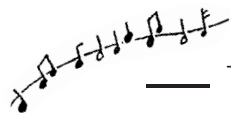
国立市公民館

図書室月報

2021 年(令和3年)9月5日

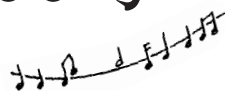
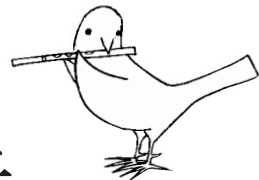
第 700 号

〈図書室月報700号記念〉



— 市民と紡いで —

図書室月報創刊 700 号



今号で図書室月報は創刊から700号となりました。1955年に公民館が開館、翌年1956年に図書室が開室、そして図書室月報は1959年に創刊されました。

図書室月報の第1号の1ページ目には図書室月報を発行するに当たって、「この新聞が運営者と利用者の交流合体の場であり、積極的読書活動の結晶の場であり、発展途上の図書室の姿を如実に反映する場でもあるような、そんな内容のものに育てていきたい」と書かれています。

この創刊された当時から今年で62年、これまで、様々な方々の本の感想や市民グループの活動の様子、国立ゆかりの話など、多様な文章が紙面を彩ってきました。

創刊号から順を追って図書室月報を読んでいくと、図書室月報に寄せられた市民の方々からの文章から、そのときどきの図書室や国立の様子が窺えます。また、紹介されている本から、掲載当時の時代背景、出来事、またそれに対してどのような考えを持っているか等々、色々な方々の意見を伺うことができて興味深いです。

例えば、国立で地域の雑誌を発行している方や子どものための文庫を

開いた方が、活動の様子、公民館との関わりなどについて書いていたり、国立の各所を描いている方が国立の街の絵を載せていたり、三島由紀夫や向田邦子が亡くなった折には、作者や作品について当時思うことが書かれたりしています。

月報自体についても、様々な方々が月報創刊からの記念号の折や公民館図書室との関わりについて書く中で、ご自身が感じていることを書いて下さっています。

例えば、1991年5月5日号(336号)から複数号にかけて「公民館図書室と私」と題して市民に寄せていただいた文章で、336号では都留由子さんが『図書室のつどい』や『文学講座』に参加した人の書かれた文章や感想を読むことで、参加はできなくても、参加したような気持ちになり、その本を読みたくなることも多い。同じ公民館図書室で本を借りていく人が書いたのだと思うと、新聞や雑誌の書評よりずっと身近に感じられるからかもしれない」と書かれています。

また、1991年7月5日号(338号)では、同じく「公民館図書室と私」において小山晴義さんが『図書室月報』によって、一人の作

家や一冊の本がずいぶん身近になつていくことがよくある。知っている人が書いている時はもちろん、いつも興味深く読めるのは、この『図書室月報』の効用によるところが大きいのだと僕は思っている。これからもこの『月報』がきっかけでいろいろな本や人と知りあえて、つながっていったらいいなあとそんなことを期待しながら僕の極私的公民館図書室応援文とさせてもらおう」と書かれています。

700号発行となった現在は、新型コロナウイルスの影響で多くの人が集まって過ごすことや普段会わない人と接触することがなかなか難しい状況です。公民館を利用される方の中にもサークル活動を自粛される方や講座の参加を控える方がいらつしやるのではないかと思います。

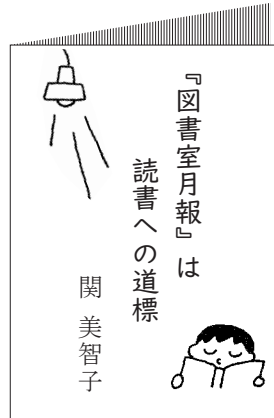
そんな中で、この700号がこれまでたくさんの方たちの活動や熱意、つながりを積み重ねて、ここまで歩んできたことを大切に思い、これから人と人との交流の場として、新たなつながりをつくりだす読み物であり続けられるよう努めていきたいと思っています。

(公民館)

〈図書室月報 700 号記念〉

私と図書室月報

〈創刊 700 号の節目に思うこと〉



国立の公民館図書室を訪れたのは、今から十年程前であった。一番奥の机に高齢の女性が分厚い本を読んでおられた。思わず本の題名を訊ねると「源氏物語です。」と返答され言葉が続いた。「この講座を受講するために国立へ転居したので。」と。その女性の文学講座に対する熱意と文学講座の人を引き付ける魅力に圧倒されてしまった。それから公民館へたびたび足を運び『図書室月報』や掲示を見て、文学の世界へ一歩足を踏み入れた。その過程を履歴すると、一つ目は「詩のワークショップ」である。内容は詩について。詩の作り方を実践。ゲスト詩人の詩の朗読とお話。三人による連詩作りの体験。最後は受講生の合同詩集作り。

よい詩は『図書室月報』に掲載された。終了後、国立の「詩の会」へ入会し、詩作に励む日々である。二つ目は「古典への招待」。『方丈記』や『徒然草』の講座を受講。古人の生活に触れ、その時代も佳き事や悪しき事もあり、大火や震災などもあり、詳細に記述してある。物事は歴史に学べと言われるが、古典文学は歴史の教科書である。三つ目は、「ブッククラブ」講座である。一年間に八冊の指定本を読む。毎回指定の本を読み、読後感を語り合い、読み解く。最後に講師の解説と質疑応答がある。八冊の本を読み終えると感想文を提出し、文集作りを併せて反省会を持ち、次年度の作品の選定を行い、テーマを決める作業がある。秋には文学散歩も予定されており、文学愛好者にとっては、国語力アップの講座である。私は高齢で芥川賞受賞作品『ごさんご』の時から受講しはじめ、現在に至っているが文学の友も出来、人生にプラスの面が多々あり、本を読むことが唯一の楽しみである。四つ目は「図書室の

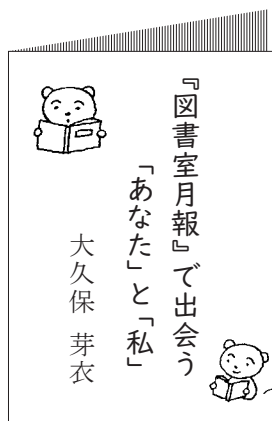


『図書室月報』を毎号でいねいに読んでいる方、公民館の講座に参加し、講座資料の本棚として図書室や月報を活用している3名の方に月報 700 号への文章を寄せていただきました。

つどい」である。印象に残っているのは、企画作家氏田雄介氏の『54 字の物語』のお話。小学生も受講。54 マスに物語を書く実践もあったが、またたく間に十名程の方が書かれ黒板に展示された。市民の書く能力に感服。この講座は半世紀前から施行されており本と著者と読者との一期一会のつどいに感銘したのであった。五つ目は、毎年年度末に『図書室月報』に掲載される「今年印象に残った本」の投稿者数の多いこと。国立市民は読書家で筆が立つ。このことが「市民の書評紙」と言われる由縁であろうか。納得である。

最後に、『図書室月報』は今年の九月に第七〇〇号を迎えられるという。この機会に『図書室月報』の冊子一号を読むことを御勧めしたい。今とはサイズも違い、ガリ版刷り。青インクの匂いがして、その時の熱気と声が聞こえてくるようである。歴史を知る機会でもある。

あらためて、第七〇〇号おめでとうございまして共に関係者一同に感謝申し上げます。



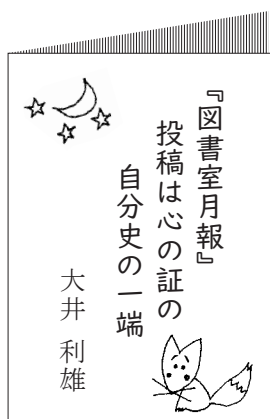
そして更なる内容の充実に勤しんで頂きたいと思います。

「私の本棚から」のコーナーをしばらく担当していたことがある。毎月死ぬ思いをして書いていた。いつもなら通り過ぎてしまう感情の機微を言語化することが、私にとっては酷く難しく苦しい営みだった。

私たちは毎日、とてつもない量の情報を浴びながら生きている。それらをただぼうつと眺めて過ごしている。確かに何かを受け取っていたはずなのに、次の瞬間には心から消え去っている。感情が動かない。何も言葉が出ない。その行為はまさに「消費」だ。「消費」の対極にある営みは「創造」であると思う。何かを

見つめること、何かを自分の中に留めること、何かを形づくること。「私」が介在してはじめて「創造」は可能になる。「私の本棚から」からは1000字ほど。これだけの文章を埋めるためには、読むことから得た感情の揺らぎを見つめ、「なんで」「なんで」「なんで」と自分を深掘りして行かざるを得ない。いくつもの「なんで」を自分の内側に反射させるにつれ、おぼろげに「私」が見えるような気がしてくる。「創造」を通して、私は「私」に出会うのだ。

「私」に出会い、「私」を表すことにこれほどの丁寧さと葛藤が求められるとしたら、人々がそれぞれ抱える「私」、つまり私にとつての「他者」に出会う機会は、意外にもあまりないのではないかと思う。どれだけ情報を浴びても、そこに「私」と「あなた」がいなければ、私は一人なのだ。世界は広がっているように見えて、実は私の中に閉じている。『図書室月報』には「あなた」がいる。私は書き手のあなたのことは知らないけれど、文章を通して「あなた」という「他者」に出会うことが出来る。私好みにカスタマイズされていない、私の世界に付度せずに出会える「他者」である。こうした出会いはこれからますます重要になってくるはずだ。『図書室月報』がこれからの時代も末永く大切にされていくことを願って。



公民館の存在を意識したのは、会社退職後であり、付き合いの歴史は浅い。ある講座をきっかけに、見落とした原石を探すかのごとく、足しげく通うようになった。

月報にも、毎年続けて、駄文をのせてもらい、自分の心を言葉にした貴重な自分史の一つをなす感がある。投稿された他の人の作品・感想も、選択する上でのよきガイドとなる。

『図書室月報』への初投稿は、2008年「今年印象に残った本」で『永遠平和のために』カントであった。その後毎年投稿しているが、題目をみると、当時の心情が懐かしく浮んでくる。あまたの本から一冊選ぶのは、迷いもあるが、投稿間際に読んだ本が多い。

2012年12月から5月の6回「私の本棚から」で『ローマ人の物語』塩野七生をはじめ、好きな本を紹介させてもらった。職員の方と話しながら、タイトルの図を選び、短文の中に本の真髓と、所感を毎月書くのは楽しみであった。

1回1冊では足りないもので、よくばって複数冊を選び、第5回目、600号には大作『天皇の世紀』大佛次郎と『遠い崖』萩原延壽を紹介した。

東日本大震災のあった2011年10月の第581号には、3・11大震災の原因と対処を、感性を持ちシステマ的叡智で展開しよう」とのキャッチフレーズで数冊の本を紹介した。事故10年を過ぎても未だ復興にほど遠い現在、公民館で連続シリーズを度々行い、風化させないように振り返り、解決に向けて課題を示し続ける姿勢は貴重である。

「ブッククラブ」の初参加は、2011年第6回の国立市出身の芥川賞作家多和田葉子の『ゴットハルト鉄道』だった。

10冊以上読み、要点を記し、ドイツの友人に、ゴットハルト峠や在独作家、多和田葉子の評判をきいて臨んだが、亡き飯山さんが、事前に調べた資料を用意されていて、その博覧強記に驚かされた。自分が選択したら出会わないジャンルの本を、出席者の感想、講師の先生の説明を交えて、読みを確かめ刺激を受ける良い機会である。2014年、『俺俺』星野智幸の感想文を書き、読みを深める体感をした。昨年第1回からの全作品338冊を読み切り、「ブッククラブ」が選ぶ「100冊の本」をメンバーと作るのが夢となった。

『図書室月報関連年表』

- 1955 公民館開館
- 1956 土曜会図書館の蔵書1300冊、書架5台の寄贈を受け、公民館図書室開室
- 1959 「月報」第1号発行(カリ版)
- 1964 第1回「図書室のつどい」開催
- 1966 「月報」50号
- 1970 「月報」活字印刷になる
- 1971 「月報」100号記念特集
- 1974 中央図書館開館、公民館図書室の3分室を図書館に移管
- 1977 第1回「読後感を語るつどい」開催(のちに「文学講座」「くにたちブッククラブ」となる)
- 1979 公民館改築
- 1984 「月報」200号記念特集
- 1985 「月報」250号記念特集
- 1988 「月報」300号記念特集
- 1996 「月報」400号記念特集
- 2005 「月報」500号記念特集
- 2006 「月報」公民館図書室50周年記念号
- 2010 第27期公民館運営審議会が第23回定例会で月報の存続を要望
- 2011 第28期公民館運営審議会より「公民館図書室の管理・運営について」の答申が出される
- 2013 「月報」600号記念特集
- 2020 「月報」公民館ホームページに掲載開始
- 2021 「月報」700号記念特集



ブッククラブから

高橋弘希著

『指の骨』——ラストで加速する暴力の凄み——

岡野 正義

新潮新人賞を受賞した高橋のデビュー作だ。その後『送り火』で芥川賞を得るが、共に凄まじい暴力の発露を読者に印象づける。

『指の骨』は、ニューギニアに送られた若き兵士が語り手で、最後まで名前は伏せられている。

戦争は暴力の支配する世界である。理不尽に一枚の召集令状でどこかの戦地に送られるか本人は分からない。死は日常で多くの兵士・傷病兵が様々な死を迎える。

負傷して野戦病院に収容されるが、語り手が行った戦闘は一度だけだ。濠兵の若者の胸を狙ったが、左肩の痛みで狙いがそれて首に当たり死亡させた。

「夥しい血液が噴水のように上空に舞い上がり（中略）殺傷行為をしておきながら殺意はなかった。あの若者がきよんとした青い瞳で私を見た」

野戦病院では、きき手の手首から先を失っても不自由な反対の手で巧みに鉛筆画を描く清水や、現地人とカタコトの言葉操りながら交流する眞田と仲良くなる。

野戦病院での生活は、死が身近なものだったが戦闘はなく、現地の村人に果実をもらったり、祝祭に参加し踊ったり、将棋盤を作って楽しんだり、ほっとさせる場面も少なくない。

マラリヤが重症化した清水は、最後に現地の村で絵を描いた後、死ぬ。眞田は、小さな子が内地にいることを話していたが、風土病が悪化して亡くなり、遺品として切り落とされた指を語り手がもらい受ける。

戦場のオアシスであった野戦病院から動ける者は、転進（退却）することになった。親しかった軍医は、動けない患者へ数日分の食糧といくらかの医薬品を残して行くことを断腸の思いで告げる。ここからが悲惨な行軍の始まりで、暴力の表現が速度化されていく。

目を覆いたくなるような描写が続く。遺族に自身の骨を届けてほしいと頼まれた兵士が、その遺体を焼いているうちに食欲をそられて、残りの指も切り落として食べてしまう。

傷口に湧いた蛆に腐肉を食べさせ、今度は飯盒で蒸かして俺が蛆を食べる、とある兵は洩らす。

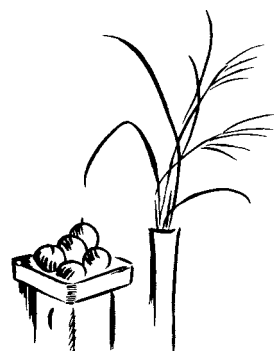
自決するために渡された手榴弾は、魚をとるために使ってしまった、寒さに耐え切れなくて、小銃の木の部分は焚き木となっていた。武器もなく、飢餓の中さまたよい歩き倒れて行く。

飛び出した目玉が、視神経か筋肉かにぶら下がり、その筋には蛆が米粒のように付着している。垂れた眼球はそのうちに草地に落ちるだろう。

畳みかけるように次々表現される内容はぞつとさせるが、文体は簡潔・冷静・端正である。

暴力に突如まき込まれて翻弄され、あらがうことのできない人間の有様に高橋は関心を持っている。

語り手は飲まず食わず街道を歩いた末、木の幹に背中を預けずると腰を下ろす。立ち上がる力がないことが分かった。アルマイトの弁当箱に眞田の認識票と指の骨は持ってきた。私（語り手）が白



くにたちブッククラブ

—人生、野を越え山こえて—
川端康成『山の音』（新潮文庫）

講師 かない 金井景子
(早稲田大学・日本近代文学)

とき 9月9日(木) 夜7時半～9時半
ところ 公民館 地下ホール
申込先 公民館 ☎(572)5141

* 次回は10月14日(木)
古井由吉『辻』(新潮文庫)です。

骨化しても何十年か先に届けられることを夢想する。自分自身の認識票と妹のお守りは失くした。

『送り火』のラストの暴力の発現の凄まじさは一層きわだっていと思う。ぜひ合わせて読んでみてほしい。

作品の最後について、『すばる2021年7月号』の奥憲介「けもの故郷——高橋弘希と安部公房」によると、奥は「自死」と言っているが、「あやまつて爆死した」方がふさわしいと感じた。

新着図書から

〈哲学 心理学 宗教〉 カルトの子 米本和広 (論創社) 169 〈歴史〉 アウシュヴィッツを生きのびた「もう一人のアンネ・フランク」 自伝 エディス・エヴァ・イーガー (パンローリング) 289 あいぬ物語 山辺安之助 (青土社) 289 〈社会科学〉 インターネットとヘイトスピーチ 中川慎二編著 (明石書店) 316 人びとのなかの冷戦世界 益田肇 (岩波書店) 319 逃亡者の社会学 アリス・ゴッフマン (亜紀書房) 327 移民・難民・マイノリティ 羽場久美子編著 (彩流社) 334 〈当事者宣言〉の社会学 樫田英雄編著 (東信堂) 360 欧州の排外主義とナショナリズム 中井遼 (新泉社) 361 世界の日本人ジョーク集 早坂隆 (中央公論新社) 361 外国人労働者を1人でも雇ったら読む本 常見治彦 (自由国民社) 366 親をおりる 明石紀久男 (彩流社) 367 うらやましい孤独死 森田洋之 (三五館シンシャ) 367 自死遺族として生きる 若林一美 (青弓社) 368 終の棲 北沢美代 (芸術新聞社) 369 津波を乗り越えた町々 谷口雅彦 (双葉社) 369 災害から家族と自分を守る「災害心理」の基礎知識 野上達也 (セルバ出版) 369 魔女街道の旅 西村佑子 (山と溪谷社) 388 〈自然科学〉 身近な雑草たちの奇跡 森昭彦 (SBクリエイティブ) 470 死の恐怖を乗り越える 佐々木常雄 (河出書房新社) 494 〈工業〉 フクシマ後10年 橋川武郎 (文眞堂) 501	気候を操作する 杉山昌広 (KADOKAWA) 519 気候変動に立ちむかう子どもたち アクシャート・ラーティ編 (太田出版) 519 災後日本の電力業 橋川武郎 (名古屋大学出版会) 540 福島第一原発事故の「真実」 NHKメルトダウン取材班 (講談社) 543 体と向き合う家ごはん ウーウェン (扶桑社) 596 日めくりだより 高山なおみ (扶桑社) 590 〈産業〉 むらの小さな精米所が救うアジア・アフリカの米づくり 古賀康正 (農山漁村文化協会) 611 有機農業で変わる食と暮らし 香坂玲 (岩波書店) 615 ダチョウはアホだが役に立つ 塚本康浩 (幻冬舎) 646 〈言語〉 辞書編集者が選ぶ美しい日本語101 神永暁 (時事通信出版局) 810 モダン語の世界へ 山室信一 (岩波書店) 814 〈文学〉 母恋い 大野雅子 (PHPエディターズ・グループ) 902 日本語にとらめっこ モハメド・オマル・アブディン (白水社) 91ア クララとお目さま カズオ・イシグロ (早川書房) 91イ 文豪たちのスペイン風邪 紅野謙介解説 (皓星社) 91こ つまらない住宅地のすべての家津村記久子 (双葉社) 91つ 物語のものがたり 梨木香歩 (岩波書店) 91な ドキュメント 湊かなえ (KADOKAWA) 91み 魂手形 宮部みゆき (KADOKAWA) 91み おたがいさま 群ようこ (角川春樹事務所) 91む むしろ、考える家事 山崎ナオコ (KADOKAWA) 91や ヤマザキマリ対談集 Dialogos (集英社) 91ヤ 自転しながら公転する 山本文緒 (新潮社) 91や 家にいるのに家に帰りたい クオランビン (辰巳出版) 92ラ
--	--

図書室のしゅご

ゆつくり、いそげ



「カフェからはじめる人を手段化しない経済」
お話 影山 知明 (コーヒー店経営者)

今の経済・社会では成果や目的を先に決めて、最短距離で、その達成を目指す傾向にあります。その中では、期日を決め、その目的が達成できたか否かで人が評価されます。人はまるで目的を達成するための道具のようです。

その社会の価値観を180度転換してみたらどうかと影山さんは提案します。一人一人が持つ可能性を最大化するように、お互いが関わり合える社会。その考えのもと、影山さんの西国分寺にあるカフェ「クルミドコーヒー」は、カフェの営業からはじまり、地域通貨、哲学カフェ、出版と活動を広げました。一人一人が大切にされる経済・社会を目指すために何をすべきか、考える機会にしたいと思います。

〈影山さんの本〉表題作 (大和書房)、『続・ゆつくり、いそげ』植物が育つように、いのちの形をした経済・社会をつくる (クルミド出版)

とき 10月10日(日) 朝10時〜12時
ところ 公民館 地下ホール

定員 会場受講40名・オンライン受講30名

※いずれも申込先着順

申込先 9月9日(木)朝9時〜

10月3日(日) 夕5時

公民館 ☎(572)5141

*オンライン受講の詳細は

公民館だより9月5日号をご覧ください。

図書室のついで

世界の神様 解剖図鑑

お話 平藤 喜久子 (國學院大學)

神話の歴史は人間の歴史と同じくらい長いと言われていま
す。「世界の始まりや国の起源」「人がどう生まれ、なぜ存在す
るのか」といった、古来より科学では完全に解明できないよう
な疑問にも、神話は答えてきました。

『古事記』『日本書紀』といった文献を紐解けば、イザナキ、
イザナミによる国生みの話のほか、アマテラスやスサノオなど、
魅力あふれる神々が登場し活躍します。世界中にこうした神話
と似たものがあるのも不思議な点です。

日本を中心とした世界の魅力的な神々と、そこからわかる
人々の世界観や歴史、文化、人類の移動の過程について平藤さ
んにお話いただきます。神話ゆかりの地に親近感がわくきつ
かけにもなれると思います。

〈平藤さんの本〉 表題作・『日本の神様解剖図鑑』(エクスナ
レッジ)、『いきもので読む日本の神話』(東洋館出版社) ほか

とき 10月2日(土)

昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込先 9月7日(火)朝9時〜

公民館 ☎(572)5141

*発熱や体調の悪い方は、参加をご遠慮ください。
また、マスクの着用をお願いします。



〈私の本棚から 第6回〉

谷川俊太郎著

『いつかどこかで』

『子どもの詩ベスト147』



上野 千晴

子どもの頃買って貰った『21世紀子ども百科』
(小学館)には、最初の項目「あ」から始まる言
葉として、谷川俊太郎の『あい』が掲載されてい
た。ひらがなのあいと漢字の愛で表現されている
12行の詩に、生きることの理が凝縮されて詰まっ
ているように思える。声に出して読むとなおさら
言葉の強さを感じずにはいられない。詩は朗読し
てこそだと、この詩を読むたびに実感する。今で
も子ども百科を開くたびに繰り返し読んで、最後
の一行に、命を懸けて生きなければと心を奮い立
たされる。これからもずっとこの詩を心に生きて
いきたいと思う。

あいが掲載されている詩集を探して出会ったの
が『いつかどこかで』。著者の全詩作品から抜粋
された147編が発表年代順に並んでいる。ひら
がなで書かれた詩が多い。ひらがなの詩は歌のよ
うだ。子どもにも読み聞かせてもよいだろう。リズ
ムを付けて歌ってもよし。楽しみ方は読書の形に
留まらない。言葉の持つ音から想像力が膨らんで
とても楽しい。教科書を音読した時を思い出す。
繰り返される単純な言葉や擬音語、擬態語、比喩。
短くて、自由で、リズムカル。著者の詩は特に、
表現が面白くて豊かで大好きだ。

いつの間にか自分は、子どもとは違う生きもの

係から

今月で上野さんの
「私の本棚から」は終
わりを迎えました。
毎回違った雰囲気
の本を豊かな表現で紹
介いただき、ありが
とうございました。



にでもなった気でいたが、それは違った。ずっと
子どもの地続きだったのだと、詩の多くを読んで
ハッとさせられた。子どもの心の葛藤や大人への
反発心、憎しみや嘘、自然や生死、別れなど、深
意を突いてくる内容も多く題材にしている。優し
さと厳しさが共存する。生きていく上での怖さも
包み隠さず突き付けられる。大人には言わないけ
れど芽生えた気持ちや、大人になんか分かるもの
かと秘めた想いなどが蘇って重なる。子どもの自
分が内側にスッと現れるような感覚になった。
それは、子どもが見ている世界を詠んだ詩だ。
いつか見たはずの視点だ。子どもの詩と銘打っ
ていることにも納得する。大人も皆いつか子ども
だった人だ。泣いたり笑ったり歌ったり、何かを待
ち望んだり、眠ったり、人を愛したり。もっと自
由で素直になつて良いような、それを許されたよ
うな、解放を提示されているような気持ちにな
った。
詩集の良いところは、好きなページを開いて読
める事。何処から始めてもよい。それが好きだ。
気分によって開いてみた先に、短い言葉との出会
いがある。それが時に、人生の導となる出会いに
なることも。
(集英社)